第８１回愛知学院大学モーニングセミナー

「忠臣蔵はなぜいまも国民的に人気があるのか？」

ー仮名手本忠臣蔵における人気の秘密を学ぶー

南山大学　人文学部　日本文化学科
教授　安田　文吉

2012年12月11日

○仮名手本忠臣蔵（かなでほんちゅうしんぐら）

☆**初演・作者等**　浄瑠璃・歌舞伎の代表作品。寛延元年（一七四八）八月一四日初日で大坂道頓堀竹本座で初演。同年一二月大坂角の芝居（嵐三五郎座）で歌舞伎に移される。翌年江戸三座で競演。森田座は二月六日から、市村座は五月五日から、中村座は六月一六日から。赤穂義士の仇討を題材とする。歌舞伎に移植されて独特の発達をとげ、劇壇の独参湯（起死回生の妙薬）とまで言われ、上演回数の最高記録保持作品。外題は、四七人の忠臣の討入から四七年目に仕組まれたので、仮名四七文字に準えている。作者は竹田出雲・三好松格・並木千柳（宗輔）。

☆**構想**　赤穂義士事件を「太平記」の世界に置き換えて脚色したもの。討入りした赤穂の浪人が四七人、この年が討入りから四七年目であったことから、いろは四十七文字に因んでこの外題が付けられた。吉良上野介は高師直、浅野内匠頭は塩冶判官などとし、作品の構成を全曲一一段とした。

〈赤穂義士事件〉

元禄一四年（一七〇一）三月一四日　江戸城内にて、赤穂城主浅野内匠頭長矩（たくみのかみながのり）が突然吉良上野介義央（よしひさ）を刃傷、浅野内匠頭は即日切腹。赤穂浅野家は断絶。（刃傷の原因は不明）

元禄一四年四月一九日　赤穂城修公。

元禄一五年七月一八日　内匠頭弟浅野大学は本家お預けとなる。

元禄一五年一二月一四日　大石内蔵助良雄ら四七名、吉良邸討入り。吉良上野介（影武者との風聞も）の首を討ち、翌朝、泉岳寺の墓前に捧げ、大目付に出頭、足軽寺坂吉右衛門を除く四六名は細川ら四家に預けられる。

元禄一六年二月四日　浪士切腹、浪士の遺子たち遠島。

宝永六年（一七〇九）一月　五代将軍綱吉逝去。七月、遠島の遺子たち大赦。

宝永七年九月　浅野大学、五百石の旗本となり、浅野家再興。

☆**概要**

全曲は一一段から成るが、普通浄瑠璃は、時代物が五段、世話物が三巻仕立てなので、この一一段仕立てを普通の五段組織の構成として組み直すと次のようになる。

大序（兜改め）
二段目（松斬り）
三段目（刃傷）
四段目（判官切腹）
五段目（山崎街道）
六段目（与市兵衛住家）
七段目（一力茶屋）
八段目（道行）
九段目（山科閑居）
十段目（天河屋）
十一段目（討入り）

初段
二段目
三段目
四段目
五段目

大序ー鶴岡社頭の場（鶴ヶ岡の響応）

〔梗概〕鶴ヶ岡八幡宮の造営が成就したので足利左兵衛督直義は将軍尊氏の代参として東下し、これを迎えるのは、鎌倉執事高師直と、御馳走役桃井若狭助安近と塩冶判官高定。新田義貞が討死のとき着用していた兜を宝蔵に納めることとなり、その鑑定人として、かつて義貞に仕えていた塩谷判官高定の妻顔世御前を召し、数ある兜のうちから蘭奢待の名香をたきしめた竜頭の五枚兜を選出し、直義は接伴員の塩谷・桃井とこれを納めに立つ。居残った高師直は顔世を呼び止め、歌の添削に託して艶書を渡して迫る。桃井若狭之助が来て顔世を救って立たせる。師直は怒って悪罵を浴びせるので若狭之助は憤慨する。

〔演出・特色〕大序というのは必ずしも本作だけの第一段をいうのではないが、歌舞伎でも大序といえば本作の第一段を意味するほどに著名である。ことに歌舞伎にあっては（やくにんかえな）役人替名（配役）を触れる。安永二年（一七七三）市村座で始めたものといい、今では大序の前には必ずつける。最後に人形の首をぐる

幕明きの演出ー大序の開幕前に、定式幕の外に口上人形を出し、役人替名（配役）を触れる。安永二年（一七七三）市村座で始めたものといい、今では大序の前には必ずつける。最後に人形の首をぐる

りと回転させる。（口上の芸）

口上人形が引き込んで二丁の柝があり、「天王立下り端」という荘重な鳴物になり、定式幕はゆるやかに上手からあいてゆく。古式によると拍子木を四七打ちきるまでに幕をあけきるという口伝になっていた。幕があいてしまっても舞台の人物は、ことごとく人形身といって全部頭をたれて目をつぶっている。そうして、七五三の置鼓、「東西々々」という東西声も七五三にかけて竹本が語り進められる。足利直義から順に名を呼ぶごとに、顔を上げ身づくろいをして芝居がはじまる。本家の人形に敬意を表したおもしろい演出である。

舞台の色彩美ーこの大序の舞台面の色彩美は注目すべきもので、ただしんこの幕、鶴ヶ岡の朱塗りの回廊があり、下手には二月の季節であるにもかかわらず黄葉した大銀杏が立っており、足利家の二つ引両の定紋を打った幔幕、並んでいる人々の衣裳でも、師直は黒、若狭之助は浅黄、塩谷判官は卵色、顔世のうちかけは紫、着付は赤、居並ぶ大名の大紋もそれぞれ巧みに性根が表現された配色である。

二段目ー諫言の寝刃

〔梗概〕桃井若狭之助館「諫言の寝刃」。口を「梅と桜」または「力弥使者」、奥を「松伐り」と分けている。

桃井家の家老加古川本蔵の妻戸無瀬と一人娘の小浪とが書院で本蔵に向かって、昨日の主君と師直との口論のうわさを気にしてたずねている。そこへ塩冶判官からの使者大星力弥が来る。力弥と小浪とはいいなずけの仲なのでてれるが、明朝の登城時刻を打ち合わせる。若狭之助は本蔵を呼び、家断絶を覚悟であすは師直を討ち果す決心だと告げる。老巧な本蔵は逆らうことをせず、縁先の松の枝をきって、「まっこの通りに遊ばせ」と申し上げたあと馬の用意をさせ主人の危機を未然に防ぐべく、師直のもとに赴く。

〔演出・特色〕歌舞伎でも文楽でも二段目の上演回数は低い。芝居としてあまりおもしろくないからである。この場の力弥は若衆方の役である。「松伐り」を建長寺に移して盆栽の松の枝をきるように改作した「建長寺の場」は、七世市川団十郎からだという。また明治になって「本蔵下屋敷」という改作も生れたが、これは九段目に連接するためのもの。小芝居に残り、今は地芝居に残る。またこの幕に出る戸無瀬は端役同様な役なので、戸無瀬の妹水無瀬という役名で演ずることもある。

三段目ー恋の意趣

〔梗概〕鎌倉御所で「恋歌の遺趣」。口は「大手馬場先」、中は「どじょうぶみ」、切は「舘騒動」、それにアトとして「裏門」がつく。

正七つ時（午前四時頃）、足利舘大手馬場先で桃井若狭之助家老加古川本蔵は高師直に追い付き、進物を山と並べて師直主従の機嫌を取り結び、師直に連れられて門内へ入る（足利舘門前進物場）。その後遅れて塩冶判官とお供の早野勘平が登城。恋人の勘平に逢いたいばかりのお軽は、判官の奥方顔世御前から師直へ渡すための文箱を持ってきて勘平に渡す。そこへ来た鷺坂伴内は鰌を踏む足付でお軽につきまとうが、うまく伴内をまいてお軽と勘平は逢瀬を楽しむ。足利舘殿中松の廊下で、師直を真っ二つにせんと意気込んだ若狭之助は、師直が腰抜けになっているのを見て拍子抜けするが、師直は却って鬱憤が溜まる。そのあと判官から手渡された、師直の横恋慕を断った顔世の返歌によって、師直の鬱憤は判官に向けられる。師直は判官を罵倒し、はては鮒侍だと恥かしめるので、判官の我慢も限界に達し、脇差しで抜討ちにするが、本蔵に抱き止められてしまう（殿中松の廊下の場または刃傷の場または喧嘩場）。お軽に別れて戻った勘平は、裏門は提灯が犇めき、表門は人馬で寄りつけないほどの騒ぎになっているので、裏門でわけを聞いて驚き、その場にいなかった責任から切腹しようとすると、お軽が止めて、ひとまずお軽の故郷へと落ち延びる（裏門合点）。

〔演出・特色〕歌舞伎の演出では、大手馬場先・進物場には師直も判官も出さない。駕籠のなかに師直がいるつもりで鷺坂伴内と本蔵との取引がなされる。本蔵が師直を斬りに来ると思って、家来たちにエヘンといったら切りかかれと命ずるので「エヘンばっさり」などという演出がある。また左の足を出したらバッサリというのもある。道化役の伴内の仕所である。刃傷の場で師直に姿見（鏡）を持ち出す演出は三代目尾上菊五郎の工夫したもので、若狭之助が去った後で姿見を持ち出させて着替えをする。また裏門も上演は少ないが、勘平の二枚目役を発揮する場面としてはおもしろい。三段目は進物場、喧嘩場で終るのが普通である。喧嘩場は師直が判官をいじめる下りは、師直役者が下卑た科白や憎げな態度にかかわらず、品格を落とさないことが大切。進物場の本蔵と九段目の本蔵は役の格が違うので、別の役者が勤めたり、役名を代えたりすることがある（平無精）。